SMI部門　ライセンシー世界大賞（上）

目的と手段（セールス・パースンに訪れる罠）Ver・2

サクセス・マネジメント新潟代表取締役　丸山敏幸

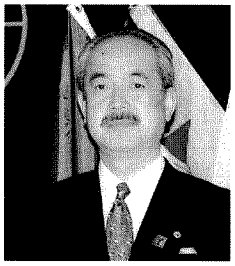
スピーチのチャンスをいただき、ありがとうございます。

今回のタイトルは「目的と手段　Ver・2」といたしました。なぜこのタイトルかといいますと、これは私が一番売っていたころの1994年、このコンベンションの場で、話をさせていただいたスピーチであるからです。このことを話すことによって、私自身の復活のチャンスにもしたい、という思いからでもあります。

□　□　□

私たちは、SMIビジネスを長くしていますと、SMIの考え方自体が商品になっているために、いつでもSMI的な考え方が自分にはできるし、また、自分自身にその心構えができていると錯覚しがちです。そして、このビジネスをしているうちに、人前で話すことも、講演も上手になり、自信が生まれてきます。

しかし、私たちはマイヤー会長の考え方やSMIプログラムの教えを代弁しているに過ぎないし、代弁するのが上手になっただけなのに、自分の考え方を自分で講演していると錯覚し、講演者になりきって自分が受けていると錯覚してしまうのです。あくまでも、SMIの考え方が受けているのに、です。このことは、私たちSMIビジネスをやっている者に訪れやすい罠です。



私は、目的と手段の整理がついていないことから訪れる罠だと思うのです。プレゼンテーションも、講演も、SMIプログラムを広めるための手段です。

もちろん、プレゼンテーションも上手になり、クローズ率を上げ、高い収入を得なければなりません。また、講演も上手になることによって、より多くの人たちの興味をそそり、SMIプログラムに期待を持たせ、プレゼンテーションを受けさせ、多くのクライアントをつくらなければなりません。

それは、1人ひとりにプログラムに投資させ、プログラムを持たせることが、私たちの目的であるからです。

講演は手段です。その手段である講演を目的化し、手段に走ってしまい、講演で受けたい、先生と呼ばれることに喜びを感じ、高い講演料を受け取るようになってしまいますと、次第にSMI概念から外れ、ただ受けを狙った、ただのセミナー講師になってしまうのです。

□　□　□

私たちの目的は、何度もいいますが、プログラムを販売することであり、1人でも多くの人たちにSMIプログラムをもたせることなのです。

講演やスピーチが上手になることは必要なことかもしれませんが、このことはあくまでも手段なのです。手段を目的化して、手段に走ってはならないのです。

なぜなら、人を変えるには、講演・セミナーでは無理だということは、SMIのセールスパースンならだれでも知っていることです。あえていうなら、人間はそんなに簡単に変われないということです。スペースド・レペテェーション、間を置いた反復の方法以外で人を変化させるのは至難の業です。ですからここに、プログラムを持たせる、与え続けることが必要になってくるのです。

フォローにも、同じ罠が隠されています。もちろん、フォローは必要なことです。より多く、より長く売り続けるためにも、より正しいフォローが必要です。ですが、フォローも手段の1つなのです。なぜなら、SMIプログラムは1人で使い、成長していけるようにつくられているからです。

フォローは、クライアントに対して、プロスペクトに対して、SMIは成果が上がるという証拠をより早く見せるためにも必要なものだと思います。と同時に、私たちがフォローを通じてSMIの知識と経験をより早く得るためでもあり、クライアントと感情の交換をすることによってセンター・オブ・インフレンスをより早く、より多く得るためにも必要であると考えています。

そして、その結果、より多くの人びとにSMIを紹介し、より多く販売し、よりよい結果を得ていくための手段がフォローだと考えています。しかし、フォローのためのフォローをしてはならないと思っています。フォローは、より多く売るためであり、よりよい成果をクライアントとともに分かち合うための手段なのです。

フォローという仕事があることによって、プレゼンテーション、セールスをすることを忘れてはならないのです。

今日、なぜ、この話を世界のプロ・セールスパースンの前で話したかと申しますと、もちろん、私にもこのサタンの誘いは多くありました。また、多くのセールス・パースンがこの罠にはまってフォローのためのフォローをし、販売活動をしない人や、講演家となって、いつの間にかSMIの組織から消えていくのを見てきました。そしていまでは、その人の噂すら聞こえてこなくなっております。

□　□　□

でも、このビジネスをディストリビューターとしてスタートした時に、私は決心したのです。「この罠にはまらない」と。お陰で、いままでに何度かこの罠から抜けてこられたのだと思います。

（次号に続く）